香川県立医療短期大学紀要　第1巻，61－69，1999

基礎看護学実習Ⅰ－①レポートの内容分析

大浦まり子*，　野口純子，　淘江七海子，　滝川由美子
堀　美紀子，　吉本知恵，　伊達裕子，　床田弘子

香川県立医療短期大学看護学科

Inspection and the Content Analysis of Student Reports on Their Introductive Nursing Practice Ⅰ－①

Mariko Ooura*, Junko Noguchi, Namiko Yurie,
Yumiko Takigawa, Mikiko Hori, Chie Yoshimoto,
Hiroko Date and Hiroko Tokoda

Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences

Key Words：基礎看護学実習 (introductive nursing practice), レポート (student reports), 内容分析 (introduction and content analysis)

序文

基礎看護学実習に関する研究は従来数多く報告されているが，実習レポートの内容についての分析は，まだ少数である．

矢口ら[1]は，「レポートには学習者が一番印象深く受け取ったもの，問題意識を強く持ったものが表れる．」と述べている．教員は学生の学習状況の実情をあらゆる機会を通してとらえ理解することが重要であるが，その際学生を理解する手がかりとして文字で書かれたレポートは，時間が経過しても消えず何度でも読み返すことが可能で，分類や比較が容易である．

そこで，本研究において基礎看護学実習Ⅰ－①終

*連絡先：〒761-0123　香川県木田郡牟礼町大字原281-1　香川県立医療短期大学看護学科
*Corresponding address：Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences, 281-1 Hara, Mure-cho, Kita-gun, Kagawa, 761-0123, Japan

了後のレポートの内容を分析した結果,2日間の実習で学生が学んだことや今後の教育的課題についての知見が得られたので，ここに報告する．

方法

1．研究目的

1）基礎看護学実習Ⅰ－①終了後のレポートに表現されている実習での学びの特徴を明確にし分類する．

2）実習目標に沿って学んだ内容を明らかにする．

3）学生の学びにもとづき今後の教育的課題を構築する．

2．研究対象

本学看護学科１年生49名（18～19歳女子）が基礎看護学実習終了後に提出したレポート（1400字程度）である．

3．基礎看護学実習Ⅰ－①の概要

⑴　実習の目的

看護の対象についての理解を深め，生活援助のあり方を学ぶ．

⑵　実習目標

病院や施設の見学を通して，患者の療養環境について理解を深め，看護学，看護実践の学習への動機づけとする．

①　地域社会の保健医療福祉施設の現状を知り医療施設の機能について理解を深める．

②　医療施設の機構と構造について理解する．

③　医療施設に働く医療チームの人々について知る．

⑶　実習の行動目標

①　看護の対象を知る

入院患者，施設入所者・利用者との対話を通して病床での生活と心理を知る．

②　入院患者・施設入所者の生活環境を知る．

病院および施設の構造と設備について知り，生活環境としての条件を知る．

⑷　実習方法

前日に全体およびグループに対するオリエンテーション（目的・目標・場所・事前学習など）を行なった.2日間の実習は，総合病院と特別養護老人ホームまたは老人福祉センターのいずれかで１日ずつ，見学を中心に行なった．実習終了翌日には，それぞれの体験内容をもとにグループ討議したものを全体で発表し，学びの確認や共有をした．

指導体制は本学専任教員と助手の２人ずつのペアで１グループ（学生５人）の担当とし，行動をともにした．実習記録は，施設毎の体験記録と実習を終えてのレポートとし実習終了後２週間目に提出させた．

表１　カテゴリー、サブカテゴリーの内容

カテゴリー	サブカテゴリー
１．施設の概要	Ａ．方針・目的
	Ｂ．事業内容
	Ｃ．組織・看護体制
	Ｄ．モットー・重点目標
２．対象理解	Ａ．身体的理解
	Ｂ．心理的理解
	Ｃ．社会的理解
３．看護とは	Ａ．目的
	Ｂ．役割・機能
	Ｃ．看護婦の資質
４．環境	Ａ．構造 ①病院（外） ②病棟 ③病室
	Ｂ．病室内環境 ①清潔・整頓 ②気温・湿度・気流 ③屋内空気・におい ④採光 ⑤物音 ⑥感覚的満足 ⑦プライバシー ⑧全体
	Ｃ．病床 ①ベッド ②寝具 ③その他

4．研究方法

レポートの文章を文脈で区切り分析単位とした．その結果,1文章１単位とは限らず，複数の文章で１単位（以下，件数とする）となるものもあった．

そして次の各段階においては看護教員４人で協議し合意を得ながら分析を進めていった．

1）第１段階

まず各文脈について，体験のとらえかたとしての記録内容の類似性に従って，「わかったこと」(実習の中で見たり聞いたりしてとらえことの記述)，「考えたこと」(見聞きした事柄の意味や今までの体験や知識とつなぎ合わせて考えたことの記述)，「調べたこと」(実習の中での疑問を文献で調べたりした内容の記述)，「自己の課題」(実習を通して得られたものについて今後自分が考えたり学んでいかなければならないことについての記述)，「実習に対する気持ち」(レポートの課題とは別に，実習に対する

表2　記録内容別の文脈件数の合計

文脈件数	わかったこと	考えたこと	調べたこと	自己の課題	実習に対するもの	合計
上位8名の合計	100(54.0)	51(27.6)	1(0.5)	17(9.2)	16(8.7)	185(100)
下位9名の合計	23(41.8)	10(18.2)	2(3.6)	17(31.0)	3(5.4)	55(100)

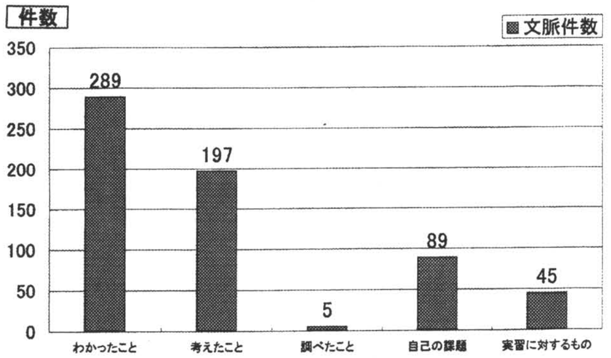

図1　記録内容別の文脈件数

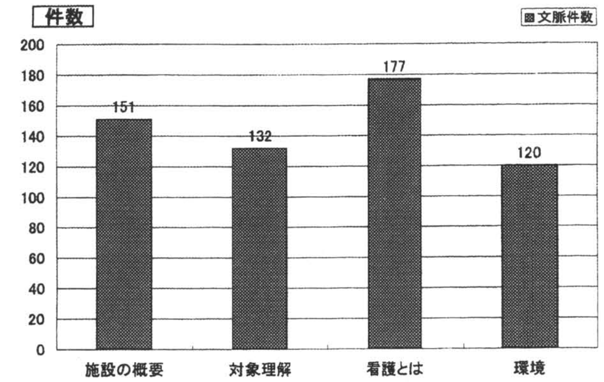

図2　カテゴリー別の文脈件数

学生の素直な気持ちが現れている内容の記述）の5つに分類した.

2）第2段階

「わかったこと」「考えたこと」「調べたこと」自己の課題」に含まれる記述内容を，基礎看護学実習Ⅰ－①の実習目標を念頭において分析し，内容を忠実に反映したカテゴリーネームをつけ表1の結果が得られた.

3）第3段階

各カテゴリーごとの文脈件数を算出し量的データとしての分析を行なうとともに，記述内容の分析を行なった.

結果

1．レポートの文脈件数について

学生のレポートから抽出できた文脈の総数は625件であった．学生1人あたりの件数は26件から4件と幅があり，平均12.8件であった.

2．記録内容の種類による分類（図1）

「わかったこと」289件（46.2%），「考えたこと」197件（31.5%），「調べたこと」5件（0.8%），「自己の課題」89件（14.2%），「実習に対するもの」45件（7.2%）であった.

また文脈数の多い上位（20件以上）8名と下位（7件以下）9名を，記録内容の種類について比較してみると表2のようになった.

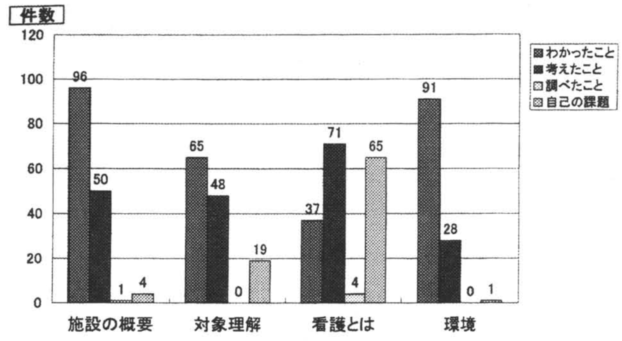

図3　カテゴリー別の記録内容

3．カテゴリー別の文脈件数（図2）

「わかったこと」・「考えたこと」・「調べたこと」・「自己の課題」（「実習に対する気持ち」を除く）の計580件の内容をカテゴリー別に見ると，“施設の概要”151件（26.0%），“対象理解”132件（22.8%），“看護とは”177件（30.5%），“環境”120件（20.7%）であった.

次に各カテゴリーを記録内容で分類すると図3の結果が得られた.

“施設の概要”151件内では，「わかったこと」が96件(63.6%)，続いて「考えたこと」が50件(33.1%)，「調べたこと」は1件，「自己の課題」は4件であった.

“対象理解”132件内でも「わかったこと」の件

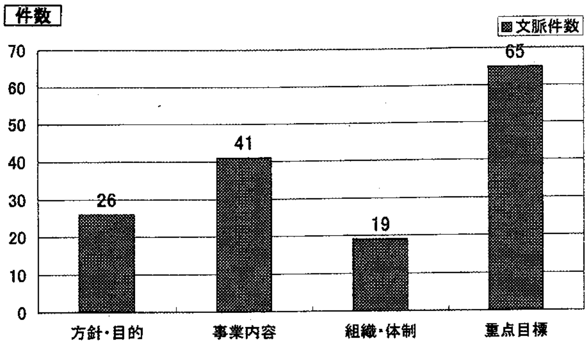

図４－１　カテゴリー“施設の概要”

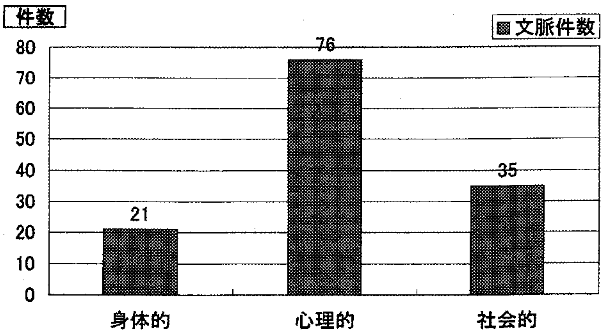

図４－２　カテゴリー“対象理解”

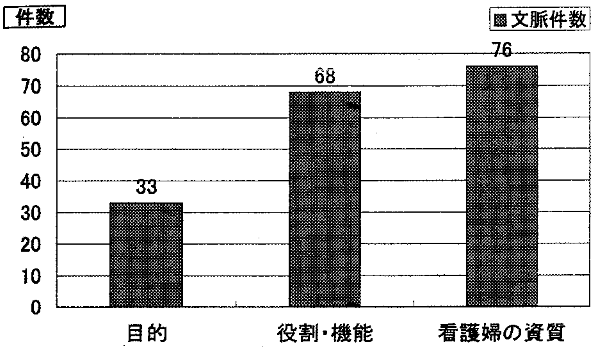

図４－３　カテゴリー“看護とは”

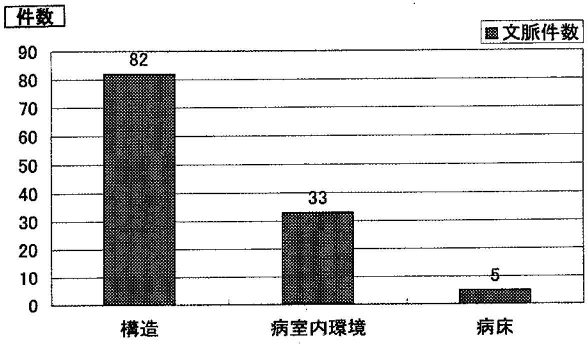

図４－４　カテゴリー“環境”

数が最も多く65件（49.2%），「考えたこと」48件（36.4%），「自己の課題」19件（14.4%）であった．

“看護とは”177件内では「考えたこと」が71件（40.1%）と最も多く，続いて「自己の課題」が65件（36.7%）であった．「わかったこと」は37件（20.9%），「調べたこと」が４件見られた．

そして“環境”120件内では「わかったこと」が91件（75.8%），「考えたこと」が28件（23.4%）であり，残りは「自己の課題」１件という結果であった．

４．サブカテゴリーの文脈件数

さらにそれぞれのカテゴリーでどのような内容に学生が興味を持ちレポートで報告しているかをサブカテゴリーに分類しその結果を図４—１～４に示した．

“施設の概要”総数151件（図４－１）からは‘方針・目的’26件（17.2%），‘事業内容’41件（27.2%），‘組織・体制’19件（12.6%），‘重点目標’65件（43.0%）の４つのサブカテゴリーが得られた．

“対象理解”総数132件（図４－２）からは，‘身体的理解’21件（15.9%），‘心理的理解’76件（57.6%），‘社会的理解’35件（26.5%），の３つのサブカテゴリーが得られた．

“看護とは”総数177件（図４－３）からは，‘看護婦の資質’76件（42.9%），‘役割・機能’68件（38.4%），‘目的’33件（18.6%）の３つのサブカテゴリーが得られた．

“環境”総数120件（図４－４）からは，‘構造’82件（68.3%），‘病室内環境’33件（27.5%），‘病床’５件（4.2%）の３つのサブカテゴリーが得られた．

６．「実習に対する気持ち」について

総数は実習前７件，実習後38件で45件であった．内容を実習前後で比較すると，実習前では「不安」や「緊張」の記述を認めた．実習後は，「意欲」，「感謝」，「実感」，「反省」，「疑問」，「安心」などの記述が見られた．

考察

1．文脈数の個人差について

学生のレポートには，2日間の経験全体をまんべんなく記述しているものと、印象に残った内容について状況を詳しく述べつつ思考を深め結論に至る過程を示したものがあり，文脈を単位とした場合，前者は文脈数の増加，後者は減少につながったと思われる．

また情緒的・主観的表現の多いレポートもあり，レポートの文章表現について指導の必要性があると考える．

2．記録内容の種類について

レポート全体では，「わかったこと」（46.2%）と「考えたこと」（31.5%）の記述件数の割合が合わせて8割を占めていた．見学や説明を聞くことの多かった今回の実習において，「わかったこと」の内容を羅列し，それについて「考えたこと」を続けて述べる形で記述しているため，文脈数の増加につながったものと考える．しかし「調べたこと」が5件と少数であり，今後文献の学習・活用について指導していくことが必要と考える．また「自己の課題」（14.2%）については，「わかったこと」「考えたこと」を自分の中で統合して記述しているため，文脈数が少なくなったと思われる．最後に「実習に対する気持ち」（7.2%）については，レポートの課題となっていなかったため件数は少なかったが，レポートの構成の一部として学生の気持ちが自然に表現されていた．

文脈数の個人差について20件以上のレポートと7件以下のレポートを比較すると，表2に見られるように，文脈数の多いレポートは「わかったこと」および「考えたこと」の記述件数の割合が多く，それに比べて文脈数の少ないレポートは割合が少なくなっていた．また文脈数の少ないレポートは文脈数の多いレポートに比べ「自己の課題」の占める割合が高い傾向にあったが，記述件数そのものに差は見られず，全員が何らかの課題を見出していた．

3．カテゴリー別の文脈件数について

各カテゴリーの文脈件数の結果より，“施設の概要”（26.0%），“対象理解”（22.8%），“看護とは”（30.5%），“環境”（20.7%）が同程度のばらつきでとらえられているといえる．

また，カテゴリー内での記録内容の種類について，“施設の概要”“対象理解”“環境”においては「わかったこと」の文脈件数が一番多いのに対し“看護とは”では「考えたこと」「自己の課題」の多さが目立った．見学や看護の対象者とのコミュニケーションが中心の初めての実習では，看護実践を行なって経験から看護について学ぶというより見聞きしたものから改めて，これから目指そうとする看護について，また自己の内面に目を向けて，認識や思考を深めることが多かったと考えられる．また「調べたこと」の文脈数の5件中4件がこのカテゴリーに含まれており，やはり最も意識・関心が高かったと思われる．

4．サブカテゴリーの内容

“施設の概要”のサブカテゴリーでは‘重点目標’（43.0%）の件数が最も多かった．これは実習の中で施設側からの説明・解説が，その施設における重点目標を中心に述べられていたため，学生が素直に受け止めレポートに記述した結果だと思われる．

“対象理解”のサブカテゴリーでは‘心理的理解’（57.6%）が最も多かったのは，コミュニケーションを中心とした関わりのなかで対象者が自分の心情を話すことが多かったことと，学生が対象理解の中でも心理面に重点を置いたためと思われる．また，コミュニケーションの中で家族の話題に触れたり，地域での施設の役割などについて考えたことが‘社会的理解’の記述につながった．それらに比べて‘身体的理解’の記述が少なかったのは，専門基礎分野および専門分野の授業の進度が関係していると思われる．

“看護とは”のサブカテゴリーでは‘看護婦の資質’（42.9%）の件数が多かったが，これは現場で直接看護者の姿や対象者の言葉に触れ，学生が目指す看護者としてのあり方や自分の課題を見出していったためと考える．‘目的’についての件数が少なかったのは，まだ学生が看護への学習が始まったばかりで意識してとらえられるまでにはいたっていないため，レポートに表現しきれなかったと思われる．

“環境”のサブカテゴリーで‘構造について’（68.3%）の記述が多かったのは，実習目標の中に実習病院や施設の見学を通して患者の療養環境について理解を深めるという内容があったこと，施設全体の見学も行なったことから注目度が高く，レポートにも書きやすかったためと思われる．

5．「実習に対する気持ち」について

実習前では，何もかも初めてという実習に対する「緊張」や「不安」の内容の記述が主であり，実習後では「意欲」や「感謝」といった記述が主だったことから，実習を行うことにより不安や緊張以上に

前向きな気持ちが大きくなったようである．安井ら[2)]は実習における「戸惑い」という単に心理的体験を次への学習・行動化へ結びつけるため，忘れないうちに想起させ整理させることの大切さを述べている．実習評価には現れにくいこのような学生の気持ちも考慮し，学習活動を促す指導を行なっていきたいと考える．

6．レポートの紹介

実習目標の内容に沿って学生のレポートを紹介する。

まず看護の対象の理解について，“対象理解”のカテゴリーに含まれている例をあげる．

【記述例1】

病気にかかった当初は「なんで自分だけがこんな苦しい思いをしなければならないのか」という気持ちでいっぱいだったけれど，Aさんは，最近ようやく今の病気とうまく付き合えるようになったといっていた．痛みや息苦しさが急に襲ってきたとき，まずは横になり深く呼吸をするとだんだん楽になり，病院に電話をするなど落ち着いて次の行動に移せるのだそうだ．

長い療養生活を通じて自分なりにこの病気の特徴を理解して，病気を恨む気持ちよりも今をどう快適に過ごすかを考えるほうに気持ちがむいてくると話して下さった．

酸素マスクを外したら一見健康な人と変わりなく見える方でしたが，私は体調のいいときのAさんを見ているからそう思うだけで，今までの苦しみ，悲しみを経験し乗り越えてきたことが，Aさんの病気に対する姿勢から伝わってきた．

看護の専門分野で働くにあたって，私が大切だと思うことは，想像力を働かせるということだ．相手の立場に立って考えることは普段の生活においても大切なことだし，そういう心がけが相手の心を思いやるという気持ちを自然と身につけさせてくれるのではないかと思う．

【記述例2】

近年，日本は，世界1位の長寿国である．保健・医療・福祉問題は，常に，問われている．政治・経済などは,はっきりよくわからない.だけど,国家予算のうちの，保健・医療・福祉面における，経済的ゆとりをもっととるべきだと思った．老人が肩身の狭い思いをしたり，従事者がひどい負担を感じたりすることは間違っていると思う．今までニュースで見ていただけだったが，実際見て，痛感した．これまで聞くだけだった問題が実際行くことによって，肌で感じられるようになった．

これは，この実習において，得られたとても大きなものだと思う．将来の，医療従事者として，小さな一歩だけど，今の私には，とても大きな一歩であった，と思う．

記述例1について，実習においては当日に初めて患者と対面し会話した時間は1時間半ほどであったが，患者は学生に対し病苦とそれを乗り越えてきた今の気持ちをありのまま語り，また学生もレポートに表現できている．学生の受け持つ患者については，状態が安定しておりコミュニケーションの取りやすい患者という条件で臨床側に依頼したため，患者の方が学生を受け入れられる人柄であったということも考えられる．そのことをふまえてみても，この学生には，その場で人間関係を作りながら話に耳を傾けコミュニケーションを深める能力，患者の内面性やそれまでの過程を想像し，感じとり表現できる資質がうかがえる．

記述例2については，社会状況についての既存の知識とつなげて理解していこうとする学生の姿勢が読み取れた．

次に療養環境の理解について“施設の概要”“環境”のカテゴリーに含まれたレポートを紹介する。

【記述例3】

病院も福祉施設も患者個人の希望，ニードを満たした看護を実践するために，設備内，食事面において工夫を凝らし，衛生面ではかなり慎重に配慮している．しかし，どんなに設備が整っていても患者を介護する人によってその患者が快適に過ごせるかどうかが決まる．それは精神的なものである．

入院患者にとって看護者は，心の支えにならなくてはならない．病気についての悩み，これからの生活のことなど，相談に応じ適確にアドバイスしなければならない．そのために看護者は看護における幅広い知識を必要とする．

【記述例4】

施設の中の一つ一つの構造を見るだけでもそこで働く人達のやさしさが見てとれる．全てが利用者や患者さんにとって快適であるようにという願

いによって，その場その場，その時々で改善しているそうだ．
　例えば，B荘のたたみについてである．当然お年寄りの方はたたみの生活を好む．しかし，たたみというのは，もしそこに便がつけば，入りこんで寮母さんがそうじをするのにも大変なことになってしまう．そこで，目の非常に細かいたたみをしくようになった．板ばりにすれば，そんな苦労もいっぺんに解消されるのだが，やはりそうしないのは，利用者が，今まで暮らしてきた環境にできるだけ近い環境で安心して生活できるようにという人々の考えから成っているのだと思う．障害のある人や家族と何かトラブルがある人，一人暮らしでさみしかった人，そんな人達にとって全く知らない施設に入ることは勇気がいることだし，不安や心配もかなり大きい．ある寮母さんが言っていたが「ここは病院の精神科ではないから，利用者1人1人の部屋にかぎは決してかけない．あくまでここは生活の場．家で，他の人を家族が外からかぎをかけることをしないでしょう.」ということだ．私はなるほどと思ったが，痴呆の人を介護するのはとても忍耐がいるから，私が実際にお世話をした後にこう言えるかはわからない．しかし，こう言えるようになれるような人でありたいと切実に思った．この言葉はいつまでも私の中で残っていると思う．

　看護には，一人ひとりの患者について，また共通した条件を持つ対象グループについて，健康障害ゆえに必要とされる条件を考慮し療養環境を整えていく役割がある．記述例3・4のように学生は施設見学や説明を通し，利用者主体の環境というとらえかたをしており，看護者としての視点で環境を理解しようとする姿勢が読み取れた．そして様々な配慮の奥に流れる職員の方々の意欲や姿勢を感じ取っていた．
　そして看護の理解について“看護とは”のカテゴリーのなかから例をあげる．

【記述例5】
　病気，障害によって自分自身の存在価値は全く損なわれていない．ところが，人は失ったものや病んだ部分だけに目を向け，偏った価値観に支配されてしまうことが多い．だから看護する立場の人は誠実さで接し，信頼される人間関係を作り上げることが大切である．そうすれば，患者は失っていた自尊心を取り戻したり，病気を治したいという意欲を呼び起こしたりすることができるだろう．しかし，理論で説明できても，実際にそれを行動に移すことは容易でない．誠実さ，やさしさ，思いやりといった心は欲しいと思ったからといって，すぐに身につくものではない．まして，他人から譲り受けるものでもない．日頃から常に視野を広げ，また広い心で人に接することが必要である．これが今の私にできることの1つであろう．

【記述例6】
　2日間という短時間で体感したことは，私が痛みをわかろうとしてもそれは大半不可能で患者さんの言葉を信じるより仕方がないと思った．私達健常者にとっては立った1時間半の会話であっても，相手には倍以上の体力負担になるかもしれない．「大丈夫ですか？」と聞いても，返って来る答えは決まって「はい.」だった．
私も何となく答えはわかっていたが，その言葉を信じてよかったのか今でも自信が持てずにいる．
また痛みといっても病気に対しての痛みだと一概には言えないのではないだろうか．精神的な痛み，病気に対する不安，寂しさなど感情から来る痛みもあると感じた．
心の痛みまで本人以外の人が理解しようなんて到底無理なのかもしれない．もしかすると身体的苦痛の方が気づきやすいようにも思える．たとえわかったとしてもただの勝手な独断では相手の迷惑にもつながりかねない．そういう風なことを感じるたびに看護婦が行なう看護はどこまで相手の生活や気持ちに入っていいのか全くわからなかった．けれど逆にこれからの3年間を通しての課題が出来た．学校の授業でまたこれからの実習で少しずつ理解できたらと思う．

【記述例7】
　今回の実習では医療と福祉，つまり看護と介護を見学したわけだが，『看護』と『介護』の違いについて少し調べてみた．
　まず，看護について辞書を引くと「怪我人や病人の手当・世話をすること．看病.」と載せてある．さらに看病を調べると「病人の介抱や世話をすること.」とある．そこで，解り易く看護婦の仕事をもとに考えていきたい．看護の仕事を規定し

ているのは，保健婦助産婦看護婦法＝保助看法である．保助看法によると，看護婦の仕事には２つの種類の仕事があって，ひとつは「診療の介助」，もうひとつが「療養上の世話」となっている．
前者は主に点滴や注射，採血などの処置や医師の行う処置の介助であり，それらは全て医師の指示のもとに行われる．
一方，後者は患者の体を拭いたり，話相手になりながら生活指導をしたり，といった日常生活への様々な援助・指導を行う．
つまり，看護婦は病気からの回復を援助する役目がある．そのため，急変が考えられる人に対しては絶えず予測的な観察をしながら，又，慢性的な経過をたどる人に対しては，その人の求めている暮らしに関して様々な情報を集めながら仕事をしている．
日常生活に関する援助を通して，患者を深く見つめ，その人にとって不足しているものは何かを判断している．ここで介護との違いを理解するためのヒントが出てきた．つまり，介護は単に日常生活の世話をすることであり，看護はあらゆる健康のレベルの人を対象に病気とのつきあい方を指導することである．そしてそのような指導が可能になるのは，日常生活の世話を通して，患者の性格・癖・家族との関わりなど，深いところまで理解することができてこそなのである．以上のことから考えて，つまり介護とは看護の一部であるといえるのではないかという結論に至った．

人間の内面理解と，それに基づいた看護ケアの実施は，看護婦の感受性，人間性，人格的成熟，人間観等に左右される側面が大きい．看護婦は自分自身を見つめながら謙虚に学びを続け，病人の訴えている内面の声なき声を聴くことを心がけながら看護をしていくことで成長していくのであり，記述例５・６にみられるように，学生はその出発点に立ったと思われる．

また記述例７のように，主体的に文献を活用して理解を深めようとした学生もいた．

今回の基礎看護学実習は入学後初めての臨地実習であったが，レポートの文脈数の分析結果において“看護とは”のカテゴリーを中心に各カテゴリーの内容がほぼまんべんなく記述されていたことや，記述例に代表されるレポートの内容から，学生は実習の目的・目標の達成に向かい意識を高めて現場をとらえ，対象に向かって心を働かせたり，過去の経験や知識と総合して理解を深めるという主体的な姿勢を持ち始めていた．

さらに実習中に感じた自分の未熟さや無力感，疑問から，これから時間をかけて知識や技術を習得しつつ探求していく看護の課題を見出し，意欲につなげていることが，全員が何らかの「自己の課題」を見つけていること，「実習に対する気持ち」の実習前後の変化，記述例６のようなレポートの内容からとらえられた．意欲を持つきっかけや後押しには，実習で接した看護者の姿や対象者からの励ましがあったことを記述している学生もいた．そして，現場の実際に触れ，目指そうとする世界がどういうものかを「肌で感じた」，「実感した」と述べ，「実習は講義ではわからないことをわからせてくれるもの」，「実習を通して，改めてこれから自分が進む場所がどういうものなのか，また今何をしなければ成らないのか，何が必要なのかを考えさせられた２日間だった.」と実習の意義について触れていたレポートもあった．これらは大下ら[4]の「臨地実習後における学習者の意欲が非常に高い.」「現実の看護の場で働く人の中から，理想の姿を見出したことで，そこに近づきたいという意欲がわいたのである.」「失敗をして，そのことから自分の力を自覚し，勉強しなければならないと思う．こうした意欲の生まれ方もある.」「看護という自分の課題とする行動の対象（患者）が見えたということが，意欲のもとになっている例も多い．感謝の気持ちや励ましの言葉を受けた場合，それは特に大きな効果として表れている.」という研究結果や，杉本ら[5]の「早期の臨床実習は講義や演習に現実感を与え，興味を喚起する点で効果的であることが確認できた.」という研究結果と同様の傾向を示していた．目標達成に向かい，今回の実習から改めて本当の学習が始まっていくのではないかと期待された．

藤岡ら[6]は，「看護学生は，単に最新の医療の知識・技術の保有者であるにとどまらず，何が看護で，何が看護でないかを，自分の力で探求していけるような能力と，そのための態度や意志を育まなければならない」と述べ，また安酸[7]は「学生が本来持っているであろう知的好奇心を刺激しながら，主体的な学習者としての成長を促進するプログラムが必要だ」としている．本研究を踏まえ，教員側としては学生の成長の芽を大切に育み，自ら看護の意味や価値をつかんでいけるような指導を，講義・学内演習・臨地実習を通して行いたいと考える．そのためのすぐれたデータ源の一つとして，今後も継続して実

習レポートを分析し，看護者としての学生の成長と教育的課題を追っていきたいと考える．

結論

1．レポートの文脈数における学生全体の状況として，記録内容から見ると「わかったこと」「考えたこと」が8割を占めていた．そして，これらの内容がレポートに占める割合が，学生一人一人の文脈数の個人差に関係していた．また「自己の課題」については文脈件数にほとんど差はなく，全員が見出すことが出来ていた．しかし「調べたこと」は全体の中でも少数であり，今後実習場面を想起させる講義や学内演習をとおした文献活用についての指導を行っていきたい。またレポートの文章表現についても指導の必要性がある．
カテゴリー別からみると“施設の概要”“対象理解”“看護とは”“環境”が同程度の割合でとらえられ，学生は見聞きしたものから改めて，様々に看護についての認識や思考を深めるという学びをしていたことがわかった．

2．レポートの具体的内容からは，学生が看護の対象に向かって心を働かせ，自分の過去の経験や知識と総合して判断・理解しようとする，主体的な姿勢が読み取れた．そして将来の目標をより明確にとらえ，自分に課題を課し，実習後の意欲の高まりを見せており，この基礎看護実習が今後の学習への十分な動機づけとなっていたことがわかった．

3．教員側としては，主体的な学習者そして看護者としての学生の成長を育むため，講義から実習まで一貫した，学生自ら看護の意味や価値を見出せる学習が行えるような指導を行なっていきたい．そのため今後も継続して実習レポートを分析し、学生の看護者としての成長と教育的課題を追求していきたい．

文献

1）矢口みどり，大下静香，大森武子（1998）学生のレポートから行動姿勢を読み取る．看護教育，39，6：p.430－434.
2）安井千明・山本明子・松井弘美（1995）基礎看護Ⅰ期実習における看護学生の戸惑いの状況とその構成要因．第26回日本看護学会論文集―看護教育―：p.5－8.
3）矢口みどり，大下静香，大森武子（1998）なぜ，行動姿勢を問題にするのか．看護教育，39，6：p.426－429.
4）大下静香，矢口みどり，大森武子（1998）臨地実習，本当の学習がそこから始まる．看護教育，39，6：p.435－440.
5）杉本幸枝，土井英子，石本傳江（1998）基礎看護学一日実習における効果と課題―学生の実習記録の内容分析を通して―，新見女子短期大学紀要，19：p.137－148.
6）藤岡完治，村島さい子，安酸史子（1997）“学生とともに創る臨床実習指導ワークブック”，医学書院，東京：p.10.
7）安酸史子（1997）経験型の実習教育の提案，看護教育，38，11：902－913.

受付日　2000年3月21日